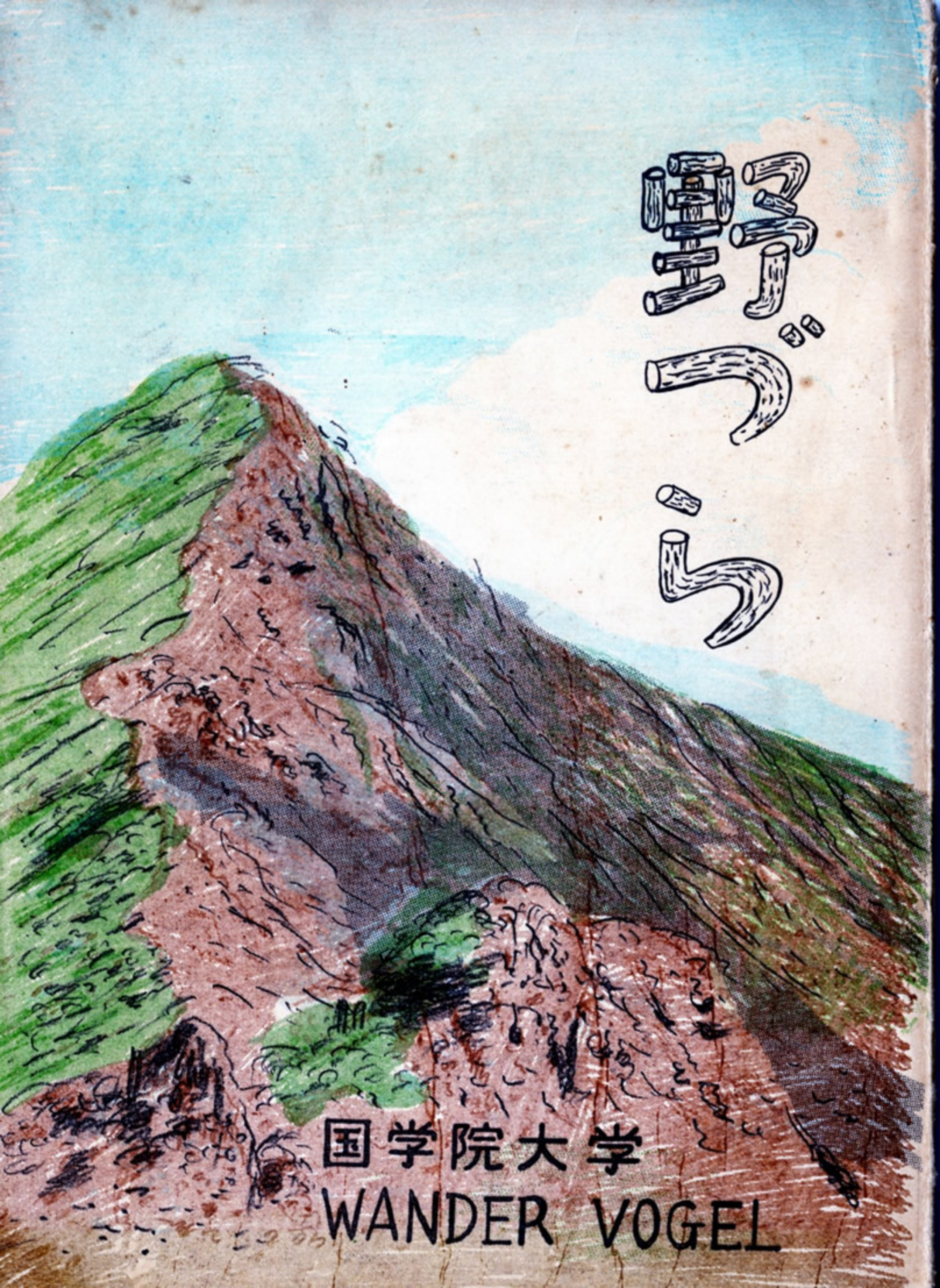

野鳥
国学院大学
WANDER VOGEL

巻頭言

この五月の「学生総会」で大講堂割れるような拍手をもって、我々ワンダー・フォーゲル愛好クラブも〃部〃という尊号をいたゞき本校の体育部会の一つとして新たに出発することになった。

考えてみれば浦田・本橋・落合ら現在四年生の勇士達が、かりそめに思いたった〃渡り鳥〃に意気投合し若さに若さを燃し二十名足らずの同好者を集めたのは、つい四年程前のこと。その後の発展も実に著しく、三年目には発足第二回の新入生を迎いいれ大菩薩の新入生歓迎ワンデリングに始まり、東北サイクリング〃奥の細道〃などと経験なしの地図だけを頼りにした無鉄砲な計画をも含めて成功に持ち込んだ。

特に〃奥の細道〃では今までのハイキング的な活動の中に新しい学生、社会人、ワンダラーという三原素を平等に調和させた、いわゆる勉強型ワンダラーの性格が大きく出現し、現地において歴史・風俗等の分野での研究も行動の中に課する風潮が濃くなり、ワンゲルの活動に重みを加えた。

もとよりワンゲルの目的は未だ明確にされていない。誰しもが「ワンゲルとは何か?」について考え、論じ合った。が結論の出たためしはない。只いえるのはワンゲルとは山岳部でもハイキング部でもなくワンゲルであるという事だ。我々は今ワンゲルの性格について理屈をこねる必要はない。〃歩く〃これこそ我々の生命なのだ。ワンゲルは人生と同じく語るものでなく体験するものなのだ。

〃部〃の王冠を今頭に戴せた王様は今日から世を統治しなければならない。それには各自がまず王様になったことを自覚しなければなるまい。

野づら ―創刊号―目次

表紙・八ケ岳

ワンダー・フォーゲルの考え方……浦田 伸郎……四

「野づら」について……山本東次郎……一九

一年生歓迎大菩薩ワンデリング紀行 伊藤 博……六

（東北サイクリング）

奥の細道いろいろ……浦田 伸郎……九

吾妻合宿夜話①……中沢 孝夫……一三

雲取巣中拾いがき……植木 陽一……一五

"スキー"のこと……二塚 洋子……一七

仮想反省会

伊豆ワンデリング……二〇

（昭和32年度）年一の出い

思

出席者

石井久治郎（司会） 中目正

相原ペン子と昭子 田代英野

伊藤博 山崎勝夫

八ケ岳ワンデリング

（阿彌陀から夏沢峠）……尾藤 良孝……二八

東北ワンデル

（唐沢山神社から日光二荒山神社） 高野 公敦 三〇

見拝並手お

1 ワンゲルランチ……相原 昭子……三四

登山講座

カメラと山……中目 正……三六

槍ケ岳のはなし……S・S……三九

天城山ハイク……二階堂淳司……四一

33年度役員プロフィル……（一九）……（三三）……（三八）……（四二）

役員会だより……（四四）

編集後記……四五

ワンダーフォーゲルの考え方

前主将　浦田伸郎

ワンダーフォーゲル運動の目的は、すでに臼井先生が「自然に親しみ、祖国、郷土、民族を愛し、志操堅固、質素、清廉、潔白、このような青年の育成にある」と述べられている。

ワンゲルの目的、本質はそれですべてであると思うし、それ以外にはないと思う。ただ我々がそのような言葉で目的を得、いざ事を行おうとする時に、言葉自体があまりに抽象的であるためにとまどってしまうのである。どのように行動したなら、これらの目的をすべて満足させる事が出来るだろうか？

我々のワンゲルは創立してから、まだ日が浅いとはいえ、すでに数多くのワンデルを経験して来ているが、その中に本当の意味で、「これが我々のワンデルだ」と云う事のできるものがあっただろう？　いたずらに山行をかさねて来たような気がする。

「奥の細道ワンデル」が、ワンゲルのすべてであると云う人もある。しかしそれとて外のワンデルに比較すれば、ワンゲルの要素をより多く含んではいるものの、先の目的を充分に満足させてはいない。

では、どのようにしたら真のワンデルを行う事が出来目的を遂行する事が出来るかとなると、目的自体、非常にはばが広いため、ワンゲルの活動は多様性をおび、性格があいまいになってしまう。

我々は、自然、人文を対称としてあらゆる事をなさねばならない。

山あり、野面あり、海あり、湖あり、それと共に調査活動までが含まれている。今まで我々はおもに山を目的達成の場としてえらび活動して来た。山行も、ワンダーフォーゲル運動の一方法ではあろうが、その面のみを強くうち出したために不健全なものとなってしまった。た

だ山岳部の「まね」を、それも、ワンゲルの文化的要素を打出すためとかの名目で、ひよわな、消極的な活動に終始してしまった。山とは限らず、自然に対して発展してゆこうとする大きな気持を持たなかった。一つのワンデルですべての目的の要素をふむ事が出来なかった時に年度を通じたワンデルで円満なワンダラーと成長する程度の、そのくらいの大きな目を開こうとせず、目先のものにとらわれすぎ、ワンゲル活動の力強さを失なって来たのである。

又、ワンゲルは「こう在らねばならぬ」「こう行わねばならぬ」と最後のダメをおした所で、そのダメおしは必ず一人相撲に終ってしまう。「考え方」「行い方」は各人各様のものでよいと思う。しかし、部として活動し部員である以上、先の目的をよくかみこんで、そこからふみ外さないようにワンデルを行う事だ。

ここまで書いて来て、結局、部員個人の精神的なものにおしつけてしまったが、そうなるより他なく、一番良いのである。

ただ、我々は、山行ワンデルの時でも、山に登り、その山が美しかった。良かった。だけではすませずに、むずかしい事だが、目を山麓に点々と在る山村、集落にむけてみるようにしたならばどうであろう　（そうしなければならないのだ）。

そして、そこにある人情、名所旧蹟、古俚伝説を知るよろこびを見出し、自分にかけている何ものかをつかみさらに土の香を臭ぎながらさまよいあるきながら今日の日本の真の姿を把握し、同時にその中に存在する矛盾を *Warm heart and cool heart* を持って見出し、その解決のために自己の最善をつくす。このような気持をワンデルの場合常にわすれないようにする事である。又、なおそれで自己の日常生活を充実させる事が出来たなら、我々はワンダラー冥利につき、重いザックも軽くなる思いがするだろう。

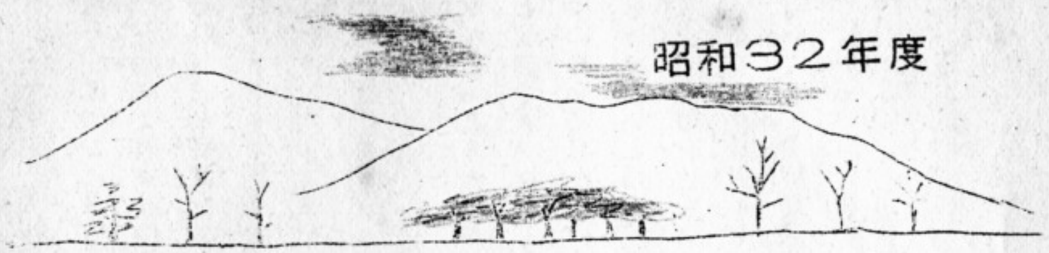
百の説法より何とやら・・・、自分はワンダラーである事を自覚し、まずザックをかついでサマヨイ出る事だ。

誰かが、「ワンデルをワンデルとして用いる所にワンダーフォーゲルの真価が発揮されるのだ」と書いていたのを読んだ事があるが、その「ワンデル」については説明が全くされていなかった。多分その人にも説明ずけられなかったのだろう。

そして僕は、ワンダーフォーゲル運動とは、まことに多様で複雑で、わからないものであると云う事が、ワンゲル生活三年にしてようやくわかったのである。

思い出の一年

昭和32年度



一年歓迎大菩薩ワンデリング紀行

伊藤博

五月の三・四と二日にわたって一年歓迎ワンデルが、残雪を全く溶かしきることない春の大菩薩峠に於て行われた。

新宿七時二十分の臨時に乗り込んだのは、団体貸切の車輌になんと十余名。一年は四人というおめでたさ。二年の男子中目氏たゞ一人。一年にしてみれば何もわからずについて行くのが精一杯。すでにワンゲルをして現在の姿を誰が予測し得たであろうか。素質は争えないもの（とこれも今だから思うもの）である。

一時間の塩山にてのバスの時間の余白も、パチンコをする者、そこいらを徘徊するもの、三々五々である。ガタピシバスに揺られて裂石へ。三年諸氏の車中の会話も新入部員歓迎に相応しいものであり、これ程楽しき部会が他に有りや、と思わせたくらいであった。

バスを捨て本橋リーダーに続き山への第一歩を記した。山をも抜かん意気にもえて……と書くと語弊があるが、一歩一歩登る楽しみはワンゲル諸氏の歓迎にもまして山からの歓待が、晴天と暖かき陽光をもって迎えてくれた。

そうそう女子の方が余名おりました。レディファーストの世にどうもエチケット知らずの奴と思いでしょうが筆者が今気がつく程お上品で、且つ黙々と歩いておられました。一年の先生四名意気投合、これまた黙々と歩く。

時々中沢大将の大声が木々を揺振る程度。と云えば騒いでいるのは言はずもがな。それも時間がたつと黙りこむ。（空腹の為なり）

ふと空を見れば、五月の空に雲を浮かべたどこまでも青い空が汗だらけの我々に微笑しているかのように、緑の風を送りつゝ東へ東へと動いている。体が吸い込まれ或いは溶けてしまうように感じたのは筆者のみではなかろう。

兎に角三時頃宿泊地大菩薩館に着く。「お早いお着きで」とは言わなかったが、すぐ女子の方が迷コックぶりを発揮、調理につく。一年はぶらり薪拾い。一段落ちつくと、心寒さを一入強く感じさせるように、明日の晴天を約束すべき夕焼が赤く木立に長い影を与えつゝ、我々の顔に反射する。落日は早く辺りの山を墨で塗りつぶす。

その中でつかった山の湯の気持が良かったことよ。風呂があんなに気持がよかったのは始めてさある。五右衛門風呂のわきからあがる煙りが目にしみるのもこの上なき風情かなと一人悦に入って鼻歌の一つも出ようというもの。炬燵で暫く時を過し、兎に角ランプの下でマレチヤンコック長指揮によるカレーに舌鼓をうつ。落合、佐川両氏の大食ぶりに一同たゞ唖然、まさに食欲型なり。

おやじにお話を色々うかゞって七時頃、空をも焦せと燃え上るファイヤーを囲みワンゲル一年歓迎式典が植木神主を祭主に、厳かに行われたのもワンゲルならばこそまさに……一笑に値するものなり。オソマチ。

翌日は早めに出発。頂上まで一気に登る。女子の方も仲々元気、軽音器たる三年生がだいぶ遅れてついて来る。これ理由あり「知らない者は幸福」とはよく言ったものである。

頂上に立った時、風は遠く秩父の連山を吹きわたり、或いは谷から吹き上げ、身を刺す冷たい風は霧氷を結び体の汗をつめたくした。

四方を見渡すと、今迄懸っていたガスが一吹の風のごとく去ると、前なる山を呑み悠然と立ちはだかる富士を始め、アルプスの連山が一大パノラマとして眼中に飛び込んできた。春の息吹きを感じさせる清楚な山々が足下に連なり、一夜の夢を結んだ大菩薩館が、あるいはそれとおぼしきあたりに一条の煙りを立てゝいるのも若きワンダラーにとって詩情豊かな風光であった。

果しない山の端が、時には紫に、或いは黒く、雲を、

霧をいだいて変化するあたり、山をして生きものと感ぜさずに十分であった。乾いた喉に残雪の味をかみしめつゝ、眼前に横たわる富士に対処して一人想いに遊ぶ姿はいわゆる筆舌に表わせない見た者だけが知る美しさだ。

自然は古を語り、旅は人生を豊かにする。（いや少々横道に入りかけました）

我々は中里氏によって知られた峠を経て一回り。大菩薩館に再度別れを告げて裂石、塩山に着いたのが、そうたしか四時頃であった。楽しかったワンデルも東京のネオンを見る頃は夜の帷と共にカーテンがおろされた。

さながら秋のうそ寒い風が梧桐の葉を一枚一枚落してゆくような、わびしくも切実な思いを胸に残しつゝ。

追記「ホントニソウナラウレシイネ」

KWVこぼれ話

△大菩薩の西部劇

頂上にバーがあるというので走っていったところ、竹貫マダムが持前の色の黒さとしとやかさにものいわせて中央に立っている。それを取りまく三人の荒くれ男浦田・植木・本橋氏、手に鉄砲や剣で戦ったが三人ともしばらくすると一斉に転倒。その一人に「どうしました？」と聞いたら、「勝つとあの黒人マダムのキスを受けなくちゃならんでねエ……」（Y）

△嫌いなモノの名

一年生分校で「自分が一番嫌いなモノ」を調査したところ、コウモリ、ヤマザクラ、タヌキ等々。ところがこれらの大半先輩の仇名にあったとか。

分校日誌

△ボーカーは団結の神

分校のまとまりのいいのに先輩舌をまいて「どうしてそんなにまとまりいいのか？」と問うに、一年一同「部室にはトランプがあったもの」

分校日誌

△〃ペン子〃ちゃんの由来

相原昭子ちゃんというよよ〃ペン子ちゃん〃といった方が分り安いであろう。今日はその〃ペン子ちゃん〃の由来を話そう。彼女が山からの帰り友だちと一緒にお土産げを買ったところ、その店先にペンギンが飾ってあった。それが又、相原さんそっくりだったことが〃ペン子ちゃん〃の命名式はそのまゝそこで行われた話。

東北サイクリング

奥の細道いろいろ

史四　浦田伸郎

晴れた日が中三日間、ずぶぬれになり、悪道になやみながらも十五日間、良く走りつづけたものだと思う。

新品のユニフォームが、今みると色あせてしまい、ひざの所などはあと少しですりきれそうだし、チェーンの油のあとがまだうっすりとのこっている。手にとると自転車の震動がまだ伝わって来るような気がする。行動中の十五日間はむろん苦痛の連続だったが、その前の準備交渉もずい分つらかった。

先だつものが先だちさえすれば何も苦労はいらないのだが、我がワンゲルは名代のスカンピンであり、無から有を生ぜしめなければならないのだからつらい。交渉の失敗続きにうんざりして動く気力もなく、ましてや授業に出る気などさらさらなく、昼間から、「南蛮」のすみの方で落合君とただ、ため息ばかりをしていた事もしばしばであった。これがもし、普通のワンデルであったならば企画を放棄してしまう所なのだが、このみちのくの旅だけは「今まで誰もやった事のない企画をして、俺達の力だけでやるんだ」と云う気持が精神的に大きな支えとなっていただけに、この交渉がだめだったら、次の交渉を、としよんぼりしよげかえりながらも考えつゞけていた。そして又、皆良く協力してくれた。もし「みちのくの旅」が成功したと云えるなら、我々のチームワークの良さのたまものと云はねばならない。

一日四十五円の食費

「盲蛇におじず」と云う諺があるが、今考えてみると我々にその言葉がぴったりとあてはまるようだ。山本君の家の舞台一ぱいに地図（五万分の一）を渋谷から岩手県平泉までずらりとひろげてみて、あらためて日本も案外広いものだ、と感じ入ったり、サイクリング車が、一

日最高どのくらい走れるものかも知らず、かってに一日の行程を割り出してしまったり、それが妥当であったから良いようなものの、どうやら薄氷の上のマンボ、と変りないあぶなっかしいものだった。なおいけなかったのは、経費をきりつめるために、副食費を大巾にけずってしまった事である。ワンゲル部員諸君の本賀はまず食い気である事を無視して、一日四十五円也（一日ですよ、一食ではない ——念のため）と云うまことにおそまつな事にしてしまった。宿泊させていたゞいた諸先輩の方々の御好意がなかったならば、「骨皮筋」になって帰京したにちがいない。夕方、つかれきって着いた時に、あたゝかく出向えて下さった事は、見知らぬ土地に旅をして、気持が感傷的になっている時だけに、つかれも吹きとぶ思いで、有難かった。仙台などでは、もうあとわずかだ、と云う気のゆるみと、先輩に対するあまったれの気持が出て、ついはめをはずし、女子をのぞく全員、酩酊し、大いにさわいでしまった。行動中に飲酒を許すし自からその範をたれたリーダーには、先輩、あいた口がふさがらなかったのではないかと思い、まことに赤面の至りである。それにつけても、あの時の酒は何と美味かった事か。

素朴だった人達

何かにつけて、東北の素朴さとか、人情とかいうことを聞いていたが、今までの僕の旅では、それらしいものにふれる事が出来ず、今頃、そのようなものがあるだろうかと疑い始めていた。その疑いも今度のワンデルですっかり吹きとんでしまった様だ。

行動中、民話調査などの場合、はとんど、農家の人々から聞き出す方法をとり、多くの人々に接したが、我々のように都会的なギスギスした生活になれきっている者にとって本当の意味での人情を理解させてくれた。

忙がしい中を見も知らぬ我々のごとき青二才の質問に懇切に答えて下さり、その上にこまごまとした週辺の話。お茶やお茶菓子でのおもてなし等。こんな事は地方の習慣だと云う人があるかもしれないが、それは頑迷な観念論者の云う事である。そう簡単にわりきる事は出来ない。都会的になりすぎている僕達はエゴイズムにこりかたまった人間をみて何の感情をも持たなくなっている。人間本来の姿とはかけはなれたものをみて、それが普通だと

思うようになって来ている。

今度のワンデルで何が一番有意義であったかと云えば真の意味での人情の機微に少しでもふれる事が出来た事より外にないようだ。僕達はこれらの事を、接した人々に対して、感謝以上のものをもって表わさなければならないと思う。

与一さんヨ許してケレ

話は変るが、黒羽から伊王野に向う途中に「那須与一波切不動」と云う小さなほこらがあった。このあたり一体の農家の人々が水害よけの神様としておまつりしている古い不動様々、御神体は「なみきりの刀」である。昔大洪水の時、与一が、その刀で、波を切った所水が引いたと云われる。その古事にならって、人々は毎年御神体になぞった刀を奉納するのだそうで、大小さまざまな刀が所かまわずうちつけてある。真に面白いながめであった。所で、この時の調査班のメンバーは、佐川、馬杉、二塚、峰村、僕と、そろいもそろっていたからたまらない。「与一さんよ、許してケレ」と云った（多分云ったはずである）と思うや、はりつけてある刀をいただいてしまった。これがこのワンデル中、僕のやったたった一回のいたずらになったのだが、今から思うと、この時のメンバーにはそれからと云うもの、あまり良い事はなかった。

まず、紅二点のかたわれ、二塚君は、向うずねに「カマイタチ」をこしらえ、ころがる事、数知れず、馬杉君も、ころがりの男子のタイトルをにぎったし、峰村君の自転車は途中からイカレ出し、とうとう最後には三段ギヤーとりはずしと云うみじめな事に相成ったしまつ、佐川君は、墨汁（ボクジルとよむ）となり帰京ののちバテ主謀者であったチンは平泉で発熱、帰京してから二週間半もバテこんでしまった等々。

このような事故はつかればかりのせいとは思えない。「那須与一さんのレイコンが……」、誰かが云った様だが全くはずれてはいないような気がする。与一さんの御霊が「刀をかえせ」とばかりにおいかけて来たのではなかろうか？「ナミアムダブツ」と、となえても、御不動様には通じまい。遠くからでも、中目君に、オハライ、でもやってもらいおわびをしなければなるまい。それにつけてもあまり変なイタヅラはするべからず、である。

リーダーは最下級小使

僕はいままでに何回となくリーダーをやって来たが、今回ばかりは精も根もつきた、と云う所である。

みも知らぬ道を地図（これがまことにあてにならないのだ）をたよりながら走るほど心細いものはない。知らなくても知っているような顔をして行動しなければならない悲しさ、道が間違っているらしくても、連日の強行で、つかれきっている部員の顔をみると、「お前ちょっと先行してみろ」と云うわけにはゆかず、早く目的地につかねばならぬ気持とで、変ちくりんになってしまう事が再々あった。そんな時、土地の人に道を聞くのが確かな方法なのだが、始めは都会的な時間の観念と、地方の時間の観念のずれがある事に気がつかず、「すぐそこ」が十分至十五分かかったり、十分くらいと云うので勇んでペタルをふむが三十分たっても着かず、聞きちがえたのではないかと心配したりした。それに加えて悪い事にツアー車は一見速やそうにみえるが、速いのは補装された路の事だけ、田舎のデコボコ道には全く無能なのである。道を教えてくれる時の時間は、どうやら、実用車の二倍くらいのスピードのようなのである。これには最後までまいった。

又、ジャーナリステックになったため、ふだんなら気をつかわないで良いところまで、気をつかわねばならなかったのもつらかった一つの原因になっている。もっと気楽な気持でワンデルを楽しめば、と思った。

夕食後発表する翌日の調査、先行班ポーターの班員ふりわけてもいやな仕事の一つであった。班わけの事など出発前には全く考えていなかった事だけにわずらわしい事一かたならなかった。うまく調整をしない事には「冷やめしばかり俺は食っている」と不満な人が出て来る。実際、相当あった様だ。作為的に冷や飯をくわせたわけではない。団体生活を基礎とするワンデルである以上、いたし方のない事なのだ。

しかし、そのような不満も、疲労が加わるとバクハツするのが常であるが、皆、よく長い間だったにもかかわらず、おさえてくれたと思い感謝にたえぬ思いである。

目に見えた成果はほとんどなかったが、「みちのくの旅」に参加した人々に「楽しかった」、という気持がいくらかでもあったなら、僕は充分満足なのである。

とに角、平泉についた時にはほっとした。そしてあらためて、リーダーは「最等小使」ならぬ、「最下級小使」であると語った事である。

吾妻合宿夜話 1

史二　中沢孝夫

空はにくらしいほど晴れて、つかれた足にほこり道はこたえた。我々のすぐそばを観光バスがハイヤーが客を乗せて走ってゆく。ブウーと又一台が我々のあせばんだ顔にほこりを吹っけて走りさっていった。「ムッ!!ブッブッブッ」「ひでえなあ」と我々はぶつぶつと文句をいいながらお互いの顔をみた。「ウツブッ!!」と誰かが吹きだすともういけない、皆道の真中でケラケラケラケラ笑いころげた。「お前の顔すごいぞ」「なにいってやんでいそういうお前の顔こそ」あせとほこりにまみれて目ばかりぎょろぎょろとした、まるで欠食児童の一団の集団移動である。その時の我々のいでたちをみてみれば足にはドタぐつをはき、ズボンもシャツもくつにおとらずよごれている。そして背中には暗夜の化物の様なリックが鎮座しましている。こんなかっこうで銀座の真中をもし歩く奴がいたとしたらよほどの強心臓とでもいわなくてはなるまい。そうこうして我々一行は秋天湖の一角にある草地に到着した。すでに出発していた人達が我々を迎えてくれた。さっそく一休みするまもなく天張である。やっとそれが終ってさざ波のうちよせる湖のなぎさで夕焼雲をみながら雑談にふけった。美しき夕焼雲の中に黒雲の少しまじっているのが多少気にはなったが夕食の支度にかかった。家庭の卓で味う飯もそれはそれなりにいいものであるが、山好きの我々にとっては野天の飯盛の飯はその数十倍に値するものがより普段少食の奴もどうかすると飯盛一つぐらいはペロリと超人的なこともやってのけることをする。うす紅の雲が湖に反射して、それを風が千に万にくだいてはきえる、まさにこの世とは思われない夕景の美しさである。楽しき夕食もすみ、我々は残火の回りに集まってがやがや騒ぎ始めた時だ。天の一角よりポツリポツリと神の涙が落ち始めた。南無参しまったと思ったのもつかのま土砂降りである。我々はテントの中に一目散ににげこんだ。テントの中のほのぐら

いローソクの灯に皆の顔は不気味である。雨はやむ様子もない。闇の中を時折鳥の声がかん高くきこえる。こうして夏期合宿吾妻の夜は雨の中に暮れていった。

「チチチチッ」とゆう鳥の声に目をさますと外はもう明るかった。どうか天気であってくれといのる心もそこそこに毛布の中からむっくりと身をおこした。ふと気づくと足の方が妙につめたい。毛のくつ下を二枚もはいてねたのにおかしいなとよくよくみると、足はぐっしょりとぬれ、靴下の毛に、水玉が光っている。ずいぶん注意したつもりだが、テントから足がでて夜末の雨にズボンまでやられたのである。皆をみると、皆も仲良くテントの外にニョッキリと足がでている。そしてシートの上にも水がたまって風でテントが動くたびに、ピチャピチャと音をたてている始末。「オイオイ皆おきろよ、足がびしょぬれだぞ」「エーッ何んだい」とねむそうにうけこたえした彼等も次の瞬間には「ウフー冷てい、しまった」である。テントの外にでてみると、雨は上ったが雲足が早い、はっきりしない天気である。我々は朝飯もそこそこにすぐさまテントをたたみ次のテンバる所を求めて出発したのであるが、前日のほこり道は一晩の雨でどろんこ道になっていた。我々はほこり道とはちがってこんどは水たまりとどろんこに悩される。「バシャン」とどろ水をはねかえし通りすぎる車、重い荷をかついでそれをよけそこなってどろんこになる我々、車と我々との根くらべがつづいたが、所詮は文明の利器にかなう道理がない。しかし小野川湖につく頃から天気は段々と快復してきた。厚い雲間から時々日光が首をだし始めた。それ今のうちだ!!バタバタッと天幕を張り終った……とくれば将に賞状ものだが世の中そうはうまくゆくものではない。クイがないクイがなければテントは張れず、そのクイを作ろうにもナタがなし、しかたなく草原にテントを広げてその上にどっかと腰をおろして一休みである天気は段々とよくなり、真夏の太陽が我々の背を手を足を、そして頭をジリジリと照りつけて今かんがえるとよくノーテンファイラーにならなかったと感心するぐらいである。何しろ暑い半裸体の我々の回りを吾妻名物のアブがいやらしい音をたてて、よいかもござんなれとどんよくな羽音をたててとび回る。草いきれでムンムンする真夏の草群に我々は或るものは立ち又或るものは坐ってアブを追ばらう元気もなくボーとしていた。唯一つのなぐさめはすぐ脇を川が流れていることぐらいであった。しかしこの時から、憚僧のような生活が始まろうとは神ならぬ身の愚人の我々にとっては知るよしもなかった。

「雲取集中」拾いがき

文四　植木陽一

十一月十七日、朝七時、我々B班は立川駅に集合したOLは浦田、SLは通称〃女房〃の笹本、参加部員は松川、高野、二塚、富田に小生、我々B班は丹波からサオラ峠を通て、三条の湯にぬけ一泊し翌日雲取へ集中する予定、既に前夜O班は通例の11時55分で塩山に出発して行っている。又A班もすでに熊谷を通って三峰へ近づいている時刻である。我々のコースは比較的楽なコースである。車窓にすぎる小河内ダムをのんびりながめて、我々は丹波に着いた、サオラ峠にかかる頃、曇天気味な空はようやく微笑み始めてくれた、サオラ峠への昇りは相当に塩っぱいコースの昇りである。大きかお姉ちゃまの二塚君は1/3も来ない内にいささかバテ気味の模様を見せて来ている、僕はいつのエクスペデション（遠征）でいも〃ひろい役〃という事になっているのでいささか気になって来た。案の定、彼女、目に見立て足基がフラッイテ来た。そして押したり引いたり（というと彼女が恐るだろうが実際そうだった・）ようやくサオラ峠の見晴合に着いた。午前10時!! 30分休息いよいよこれから約二時間の下りである。不思議なことに我々のワンゲルは下りに弱い特長を持っている。その中で特に弱いという定評を持っている浦田がOLなので我々のB班のスピードは押して知るべし!!であった。午后3時我々はやっと三条の湯に着いた。静かと言をうか完全に世間の騒音から離れた山の懐の中に又我々は帰って来たのだという感慨が胸の中によみがえって来た。山に来るといつも感じる想いだった。夕食のカレーが湯気を上げて我々の食卓に上がる頃、外は静かな暮色がそのベールを降して来ていた。夕食後、湯に入り、明日の全員集合を楽しみに早目に床に着いた。松川がウイスキーに軽く当てられていささかニギャかな声を上げている。しかし、まあ何と鼠の多い小屋であろうか「ワッ」という声と共に隣の人がとび起きた、チュ公が無断で彼氏の顔を横断してしまったとのこと。それでも強者ぞろいの部員供は何処吹く風で安らかに——と言いたいが実はなんともはや楽しい珍如な寝顔を見せて夢路をたどっていた。翌朝、元気一杯、我々は雲取に向

った。ーはずだったが、案の定、大きいお姉チャマは、雲取頂上直下の通称アゴ出ー坂で完全にいかれてしまった!! 完全に、そう字の通り、完全に、であった。約束の3時には未だ時間があった。そしてままよこのー坂の下でユウユウと昼食を採っているのと知っていて小屋へ降りたのだった。降りて来るA班を追い上げてA、B、C全員が雲取に集合したのは約束の午后3時をいささか廻っていた。そして、A、B、Cが完全に一つの国大ワンダアーフォーゲルのパーテーに変身したのは3時15分だった。期せずして手が伸びる、握手!!握手!!握手!!である、普段見なれた顔だったが、しかし、案ばらしい、新鮮味と感動をお互の顔が、目が表わしている!! 集中の持つ本当の感動が爆発したのだった。にぎやかに煙草を差し出す者、方向指示の岩板に坐って遠くの南アルプスの雪線を指している者、若さと自然を、特に山の持つ神聖な感動を信じて、愛している者が、者だけが知る感動の瞬間だった。風がまるで意志ある者の様に一瞬その襲撃の手をゆるめ、太陽がはるか彼方の連山までもその黄金の矢でいろどっていた。そんな時我々の胸に浮かんだ物はなんだったろう。作界に背を向けて、自然の中に溶け込む事が出来る者だけが感ずる、純白で崇高な愛の情感だった。

夜、小屋の中でランプの灯の下に全員が顔を連らねてお互のコースへ話を始め、そしてその話も一段落つくと、誰からともなく唱い出される歌は我々の山の歌だった。窓の外には十一月の夜の寒気がガラスにハリを入れる様にしのび寄って来ていたが、しかし小屋のランプの下の我々ワンゲルの仲間の歌声は、我々だけに感ずる温さを持ってつづいていった。

山は岩よ
我等が宿り。
俺達は
街には住めないからに……。

次の日、我々は新しく釜仙人の手によって開かれた富田新道を日原に向って降っていった。

『マレチャンの日記』より

× × ×
× × ×

〃スキー〃のこと

文三　二　塚　洋　子

三月二十八日、にわかスキーヤーで、ごった返す上野駅から、野沢に向いました。余り無謀な様子では、きまりが悪いと、予備練習のつもりで蔵王へ行ったのですがその為、不気味な位、雪焼けした顔を更にその倍は、黒くなる覚悟もあらたに、それに加えて骨折した、哀れな自分の姿を想像し、多少、悲痛なる面持で、それとも始めて行く、そのスキー場への期待もないわけではなく、小学生の遠足の如くワクワクしていたものです。暖冬の為、下界（？）では汚れた雪が、道路のわきに積まれ、ゆっくりと溶けかゝり、ぬかるみを作っています。これで滑れるのかと大いに心を痛めました。旅館よりゲレンデまでの登行によって、早くも疲労素の蓄積された足はたゞ立っている丈で、不安定にふらつきます。そこへ身丈よりずっと長いスキーをつけるのですから、滑らなくとも結果は明瞭です。ゲレンデは、段々畑とかでギャップが多く、案外、いゝ雪質ではありますが、たむろする赤やら黄やらのメイ、スキーヤー達に固く、踏み固められ適度に凹凸のつけられた斜面は、一たびスキーを揃えると、矢の如く弾丸の如く物凄いスピードがつき、ギャップでは、ジャンプする体制でー但し、これは必ずしも自分の意志でやるわけではないのですー体が浮き上り、はっとした瞬間転倒。これを、あかず操り返すのですから、そんな忍耐が自分にあったかなあと今更驚嘆せざるを得ません。さて、最初の日は、任意のまゝ雪とたわむれました。一日の疲れのしめくゝりは入浴です。こんこんと湧き出る温泉に首までつかり、互にあくびの連発、ふと見た、足腰に何と、アザが生々しく、御丁寧にも四つも五つも重なり合っているではありませんか。

二日目、言うまでも無く、体の全関部が硬ばり起き上る度にメリメリ音を立てるかとさえ忍われ一挙一動に〃うっ〃とマンボよろしく喉の奥より妙な声が押し出されます。ワンゲルだけ別行動を取って欲しいものだと思いま

したがそれもならず、皆とゾロゾロ練習を行いました。気温が下った為か固まった雪が更に固く、否応なく入れられた▲級で、清水の舞台より飛び下りる程の恐怖、仕方がないと思うあきらめ、余り欲しくもない雪を無理に噛らされるなと云う覚悟、どうにでもなれと思う、やけつぱちな気持全部がミックスされてもうわきの下が冷汗でじっとりとし、頭から血が急速に下降していくようです。ひざがコチコチに硬直し、不器用な、棒で出来た人形の足の様に、おかしい位ぎこちなく、必死の思いがそのまゝ顔に表われ、頬の筋肉が緊張し、目が飛び出るようです。目の前に鏡がなかったのは幸でした。倒れてもあまり偉大なる穴が出来なかったのは、雪が、コンクリートの如く固かったせいでしょう。昼食は、塩の入らない大きい握り飯二個　漬物にサンマの干物位です。文句を言いながらも、すきっ腹には勝てず、口程にはまずい顔もせず、一同食欲旺盛でした。乏しい財布をはたいてやって来た故、甘い物一切は、もっぱら差し入れてくれる〃奥さん〃や〃彼女〃のいらっしゃる結構な身分の人にたかりました。そして私達は、アメにつけ、ビスケットにつけ東の方に向って最敬礼をし、心から〃奥さん〃〃彼女〃を気の毒に思いました。

この日でしたか、御大隊長が捻挫、他は皆至って元気でした。その後、雪で滑った跡が直ぐ消え、こんな時『あざやかに、シュプールを描いて』滑降するのでしょうが一たび転がると、大きい穴は、ボカボカあくし、雪にまみれて雪だるまの様になり、どうにも仕末の悪い事でした。リフトで上まで登り、滑り下りた時は爽快でした。一同、思い思いの姿勢で滑降、従って同時に滑り出しても下へは、一緒につかない事になっているようです。一回三十円也でしたが、結構軽快な感じを満喫しました。最後の晩は、アルコールも許可されて、皆、適当に陽気に騒ぎました。Yさんのウクレレに合せてのNさんのフラダンスなんかは、又とない傑作で、あまり笑い過ぎてガックリした位です。スキーとは〃雪の上を滑走移動するスポーツ〃だそうですが、滑走とまでは行かなくとも転びながら、さかさに周囲の景色を眺め、雪の中に頭から突進しつゝ少しばかり移動するだけでも、ものすごく愉快でスリルに富んでいる事は、間違いありません。ついでですが、周囲の山の連なりの輪隔のさだかならぬ、そのくせ冷え切った様子、同じ様な様子で立っている木

々等、冬山の美を心ゆくまで眺める事も出来るのです。そんな時、試験の結果のかんばしからざる事、失恋の痛手、財布を落した無念さ等々、こまかい、ケチな悩みなぞ脳裏から消えうせます。それだけでも〃スキーの功徳〃と云うものでしょう。今後、是非、ワンゲルの冬の計画にスキーを含めて欲しいものだと私は念うのです。とにかく、今回は松葉杖にすがる事もなく無事帰還しましたが、ちょっとねじれた膝が、ひょっと痛くなり、これが年をとるとリユウマチとかになるそうですので、いさゝか心配しています。

〃野づら〃について

「野づら」と辞書をひいてみると①野の表面②石の自然のまゝの表面、とか訳されている。僕のいう野づらとはこの②の方である。我々が野を歩くとき路傍の可憐な草花や、風に振える一枚一葉や、矢の如く走り廻る霧には容易に接触することが、これらは野づらとは云えない。野づらの真の美は遠くからそっと眺めたとき見れる総合的な美なのである。足元に広がる無限の自然、その中に陰れて然も動いてまねる無限の課題、上から見ていると征服したような気持になる。でも永久に征服出来ないこの野づらに私達は夢を求めたい、渡り鳥たちも宿を探しながらそう考えているかも知れない。(文三山本東次郎)

役員紹介

部長　白井雅男教授
主将　石井久治郎（文三）
副将　中目正（文三）　尾藤良孝（史二）
会計　笹本太四郎（政三）　補佐　内藤利信（政四）
庶務　馬杉宣彦（政三）　補佐　未定
装備　二階堂淳司（政二）　補佐　相原昭子（文三）
中沢孝夫（史二）
編集　峰村千弘（文二）　補佐　伊藤博（文二）
相原昭子（文三）　上田実（政一）　外未定

役員プロフィル

石井久治郎（主将）

千葉県船橋市に生れ育つ。愛称〃久さん〃時々考え込むと恐い眼をするが普段はすぐ誰でも親しめる。親しまれ過ぎて損をしている。統率力は絶大とは云えないが民主的思慮の持ち主無精ヒゲで三年間〃フラレ〃の尊号を防衛している。人生型ワンダラー。

ワンデリング

反省会を
ング参加者全員出席し、すしの御馳
であるが、未熟な腕なので速記もれ
うつし得なかったことをお許し願い

海あり山あり沢があり

石井　遅くなったけどこれから伊豆の反省会をする。まずリーダーとして一言。……とにかくごくろうさま、無事に帰れて何よりだった。今度のワンデリングは僕は成功したのか、そうぢゃないのか分らないんだ。何か変な気持だね。あんなに迷ったりしてね。ヘマばかりやっていたが、しかし、ヘマした後は必ずついていたね。まあこれもみんなの頑張りの賜物だったんだ。みんな本当によく頑張ったね。毎日、キャベツのみそ汁しか食わせなかったのに全くよく力を出し合ってくれた。今度のワンデリングがうまくいったのは、天候が割合よかったこと、故障者が一人も出なかったことの外に、目を重ねる中に各自それぞれ仕事の分たんが決ってみんなが自分の良い所を十分に発揮し、それが一つのワンデリングを推進していったからだと思うんだ。伊藤が記録、中目がすい事、田代さんとベン子ちゃんがすい事とその他雑用、山崎がにぎやかす役となって、この人員構成が幸いしたんだが本当によく力を合せてくれたね。みんながこんなに頑張ってリーダーのヘマを隠してくれるようになって頼もしい限りだよ。もう、一人前のワンダラーといったところだね。

田代君やベン子ちゃんもよく頑張ったね。田代さんなんか、波勝岬の所で尾根道にたどりつく迄の急な上りを真赤になりながらもズーツとテントをかつぎっぱなしでついてくるんだから全く恐れ入ったよ。女の人も相当やるね。今迄甘やかし過ぎたよ。

伊藤　そうそうしぼるべし。

田代　えゝ、甘やかしてくれない方がいゝの。持ってく※

思い出の一年

伊豆

仮想反省会

四月五日、伊豆ワンデリングの渋谷のいづみ亭でした。ワンデリ走が出たりして盛会だった。

この記録はその時速記したものが大分あり、会の盛況を完全にはたい。

司会はリーダーの石井がした。

※れたりすると、強くならないからいつまでも山に慣れないの。

石井　よし、その言葉を忘れなさるな。

伊藤　今度はずい分バラエテイに富んでいたね。山あり海あり、沢ありだ。よく歩いたもんさ。

石井　相当きつかったな。

伊藤　そうさ。二日目八丁池へ行く時なんか、リュックが重くなるし、腹がへってくるし、ウナテンを道に投げ出したくなったよ。

三日目にやっとオツケの味がした

山崎　とにかく一日四十円位で飯を喰おうってんだからムシがいゝよ。

石井　あゝ、毎日キャベツのオツケばかりだったな。しかし毎日違うものを喰っているような気がしてたぜ。

田代　だって、出来上り具合が毎日違うんだもの。最初は味噌が少なすぎたし、次の日は多すぎて、三日目にやっといゝ味がでたんだもの。

山崎　それとメザシや小女子とコブのつくだにだけで天城を歩き通させたんだからひでえもんさ。八丁池の破れ小屋の中に張ったテントで夕食にカレーをした時、中目先輩が塩を忘れたなんていったからどんなのができるかひやひやしたぜ。どうやらカレーらしくうまく喰えたからいゝが、あれは腹がへっていたからさ。

相原　五日目石廊岬のテントの中で食べたハヤシライスはおいしかったでしょう。

石井　そうそう、あれは大分おかわりしたよ。妻良の公民館でのコンビーフとキャベツのいためたのも、田

代さんが持って行ったメリケン粉とミルクコーヒーと砂糖で作ったパンも最高にうまかったよ。何せ、マッフェルのふたで作ったんだから、食べる時、頭が下ったね。それにしても中目は料理が好きだね。

中目　そうかね。

石井　いかにも楽しそうなんだ。八丁池で雨に降られて一人で煙にいぶられながら火を焚きつけていたろう。あの時も思ったし、石廊岬の売店のカマドで飯盒をたいたり、みそ汁を作ったりしている時の様子が本当に楽しそうだったよ。自分の安住の地を見出したといった様子だった。神主さんがお払い箱になったらコックになる方がいゝぜ。

山崎は又よくにぎやかしてくれたね。

相原　ほんと！山崎さんがいなかったらお通夜になったかもしれなかった。

石井　八丁池で一日中降り込められた時は、ウナテンに一日中寝ころんでいながら一日が短かかったろう。全く山崎のおかげだよ。

伊藤　そう、あれで山さんがいなかったらどうしようもなかった。

田代　朝遅く起きて、かんぱんで昼飯の分もすませて、それからずーっと八時近く迄いっ誰はどこで何をした・というゲームや文章の当てっこをしたりしたわね。

伊藤　田代さんがえらくしんらつなんだ。人の弱点もばりばり突っ込んでくるんだから驚いたよ。

石井　伊藤は失恋すると自殺する恐れがあるなんて書かれていたな。

田代　つまらないことを覚えているのね。こっちでも小野進を忘れてはいませんよ。

石井　小野進は勘弁してくれ。話を変えよう。あの雨の朝、隣が出発したろう。彼らにどこに行くかきいたんだ。松崎に行くといった時、柳さんのことを一応いっておけばよかったんだ。柳さんには悪いことをしたね。

神妙だった御来迎

伊藤　あの雨の日に来るとは思わなかったもの。でも、下田でもう少しで会えたんだがなあ。

石井　一日遅れたので、あそこで大沢温泉に行くのをやめて下田にバスで行くように変えた時、まさかその変更先で会えるかもしれないとは思いもよらなかったか

らな。下田のバス停留所で柳さんの下田警察署え連絡せよとの掲示を見た時、自分の目を疑ったよ。ちょっと柳さんの神通力を信じたね。

伊藤　柳さんのことだからどこかでぶらぶらのん気にやってるだろうと思ったが……ひどい目に会っていようとは思わなかったからな。それにしても、久さんは全然気がつかないんだからいやだな。

石井　どうもすまん。雲行きがあやしくなってきたね。石廊崎で一泊した次の朝、寝ている山さん一人残してみんな岩だらけの岬の突端に出て日の出を迎えたろう。あの時、みんな神妙な考え深そうな顔をしてたぜ、特に伊藤は日の出から目を離さなかったね。一体何を考えていたんだい。

相原　ほんと！真けんになって太陽を見てるの。中目さんだけが写真を撮るのに動き廻っているだけ。久さんだって、だんだん物思いに耽っていったわよ。それから、前の晩、懐中電灯を頼りに絶壁の一番ハジに出たでしょう。遠くに灯が見えるだけで、一面真黒な海を船の灯が二つ、上下にすごく揺れながら近づいてきたでしょう。真下は波が真白にさか巻いているし。みんなよく平気ね。恐しくなってきちゃったのに一体何考えてたの。みんなの様子もなんだか恐かったわよ。

石井　いゝや、何てこともないさ。僕にとってはあの時のあらゆるものがいゝ清涼剤となってくれたので、ありがたく頂戴したまでのことさ。

恐いっていえば、本当に恐いと思った所があるんだ。人間の部落を出てから一時間位さんざん山道を迷った末、海岸に沢伝いに下りた所があったろう。両端を絶壁にはさまれ、後に山をひかえ、前とはだんだん高くなる波浪が待っている。人間の息吹きの全く感じられないその石浜が不気味で仕方なかったよ。あの波浪は今にも人を吸み込もうとするかのようだったな。

中目　そう、あの時、久さん、大分あわてゝいたようだった。

岩壁のすそを廻って、海べりを岩伝いに行こうと思えば行けたんだぜ。

相原　だけど、ほら、山の上からあっという間に下りてきて道を教えてくれた高校生がいたじゃない。あれまでしてくれるとは思いもよらなかったわね。本当に嬉しくなっちゃった。

田代　そう、今度位向うの人達に親切にされたことはないわね。みんなどす黒い顔をして、目をぎょろつかせて、外見は恐いけどいゝ人ばかりなんだもの、驚いちゃった。

ハンサムの多い妻良

山崎　妻良の公民館なんか最低の最高だったな。

相原　山崎さんこそ酔ったりして最高の最低だったぢゃないの。

山崎　いやー、ありや。イントクした夏みかんを久さんが喰わせなかったのがいけなかったのさ。

石井　気がつかなかったよ。夏みかんぢゃなくても蕨を喰っておけばよかったが、何せ、三十名位で騒いでいるからついこっちも陽気になって誘われちゃったんだ。あれはまずかったな。

相原　それに団長さんがとっても感じのいゝ人だったぢゃない。あの人が迷信について座談会をするからって誘いにきたでしょう。だから行く気になったんだけど。いゝ勉強になったわ。

石井　なるべく青年団の人達の気持に合せたいと思ったんだ。どうせ酒を飲んでるし、あんな席でしかめっつらをするのも馬鹿くさいしするから騒いぢゃったんだが、団長さんに悪かったね。彼、渋い顔をしてたよ。

何せ、すぐジョージさんと協同組合の学校に行ってる人がみんなの民謡に合せて踊り出したんだからね。それでも、ジョージさんの身の上話をきいたり、朝露の金ちゃんから土地の風俗や歴史についてきいたり、協同組合と大分話し込んだりしたよ。金ちゃんなかなか好きものでバーなんかによく行くらしく、協同組合からこいつはもてるんだといわれて、だめだ今一人しかいないよというので、すかさず、恋人は一人に限りますよというと、四、五人いなくちゃ面白くないとうそぶいたぜ。あの小さい柄でさ。それから突然金ちゃんが、この土地のおばあさん連中は、昔ジョロー、今のパンパンだったのさと始めたのだ。何でも昔は、妻良は下田より栄えた港で大阪からの船が上陸するのにみんなこの港を利用したので、こゝに特殊なマチができ上ったとのことだ。その関係で、この土地には古文書が沢山あり、前に京都大学から調査に来たことがあったが、調査員の中でたった一人、女の人しか読めなかったものがあったという。それらを見せようかといってくれたが、又の機会があったら見せてもらうようにした。そんな話で気がついたんだ。妻良の妻は一夜妻の意味なのだろうとだ。前の日、この部落に入って来た時、何かこってりしたよどんだ雰囲気があったし

女の人も割合美人揃いだったのも、やはりこんな歴史を持っていたからだったのだ。もっと時間に余裕があって、探りを入れたら面白いものがあったと思うよ。

田代　そういえば、青年団の人達の中にもかなりハンサムな人もいたわね。

石井　そうだな。散会してから朝露の金ちゃんと一緒に僕達の部屋に来て、　くじらを漁る話や水死人や船員同士のケンカの話をしていった、何ていったっけ。

相原　夜露のミツチャン。

石井　そう。彼なんか色は黒いが仲々いけるね。

山崎　一見、久保明といったところさ。

石井　しかし、全くいゝ人達だったね。散会の時もっと引きとめるかと思ったらきれいに散会にしたものね。僕には酒はそんなにきつくはすゝめなかったんだ。協同組合がどうしてもというので湯のみ茶わんに半分程飲んだが、うまかったねえ。それだけでもうことわったがね。それ以上向うでも強いてはすゝめなかったよ。しかし、山崎と中目があんなになるとは思わなかったぜ。殊に中目は大して飲まなかったろう。

中目　あんなはずはないけど、やはり喰ってなかったからさ。

伊藤　これから気をつけることにすればいゝが、とにかく、山さんは見ていられなかったぜ。夜中、苦しがったんだからな。次の日大丈夫かと本当に心配したんだぞ。

山崎　いや、あれは、まあまあ。

田代　山さんは寝返りばかりうつし、戸のすき間から砂が舞い込んでくるし、仲々寝つかれなかったわ。

相原　そうそう、朝、風がなかったら船に乗せて漁場迄つれていってくれると約束したのを、強風でだめになって残念だったわね。

共通する人間的温さ

石井　妻良を出て、子浦という所で郵便配達の人と知り合ったろう。面白いおやじさんだったよ。天気はいゝし、紺碧の海を足下に見ながら、初老の土地の人と、家並が豊かなのは台風に備えて家だけは立派なのを作るのだとか、この辺の部落は源氏の落人だとか、青年達が東京に憧れて今にこの辺では若い者がいなくなるかもしれない、これは一つの社会問題だというような話や、息子さんが代々木にいて、七千円の給料もらって七千円下宿代払っているとボソボソいう話を聞きながらぶらぶら歩いていると、しみじみと伊豆の清趣とか人情の機微といったものに触れる思いがしたよ。

中目　波濤崎の猿を養っているおやじさんも、話さなかったけど面白そうな人だったぜ。

田代　あの辺の人達は性格の中に何か共通のものを持っているわね。人間的な温かみとでもいえるんぢゃない。松崎の警察署の人でも……

相原　そう、あれは愉快だったわ。あんな親切なおまわりさんているかしら。嬉しかったわね。何しろへとへとになって松崎に着くと、十五分違いで四時半の最終バスが出た後でしょう。運送会社に交渉してもだめだったし、こゝで泊るほかないかなと思っていたの。それが、警察署でおまわりさんが別の運送会社に連絡してくれて、定期便のトラックが出るから荷物のように乗っていろとか、三島まで行くと警察がうるさいから修善寺で下りろとか。おまわりさんが警察がうるさいからなんていう所あるかしら。

石井　もう一人の年とったおまわりがお茶をいれてくれるしね。

田代　それから、トラックの運転手さんもずい分親切だったわよ。

石井　そう、あまり方々に止まっていくので間に合うかどうかきいた所、次から荷物があっても積まずにすぐ発車し、それから全く止らずに修善寺迄走ってくれたんだ。

中目　すごいスピードだったぜ。急カーブでも速度をゆるめないんだ。

石井　修善寺で終電かすかすでおれできなかったのが残念だったな。トラックに置き忘れた茶テンを、帰ってから東京営業所で取り寄せてもらった時、伊豆営業所の番地をきゝ、運転手の名前で礼状を出しておいたがそれにしても、四時間近くをただ乗りとは悪かったな。トラックの上で、夏みかんのかおりをかぎながら満開の夜桜見物としゃれるし、東海道最終に乗り遅れ、沼津駅迄引退し、待合室でアジの干物をラジウスで焼いて妻良を偲かしむし、最后にきてグーンと盛り上り、ワンダラー振りもどうどう板についた感じがあるね。六日間を千二百円ですましちまったし、待望の富士も見たし、お猿さんには会ったし、よう山さん、何もいゝ残すことはあるまい。

山崎　猿の方で久さんにいゝ残したことがあるとさ。

石井　それぢゃ、もう一度行って会ってくるか。まあ、

次の機会を楽しみに。

どうも、反省会としては物足らないけどこれで終りにしよう。

伊豆概念図

外七

原稿募集

締切り　三十四年二月末日

発行予定日　三十四年五月一日

△紀行文・随想

△論文・研究文

△詩・和歌・俳句

△創作・コント

△表紙・カット等

投稿は部外者でも結構です。

応募原稿は返却しません。

選択は任せていたゞきます。

編集部

ワンダーフォーゲル　国学院大学

八ヶ岳ワンデリング

阿彌陀から夏沢峠

尾藤良孝

十月十一日八時三十分に茅野を出たバスは一時間で八ツ岳農場についた。だゞっ広い八ツ岳の裾野の中に、五六軒の建物が建てられている所である。昨夜は夜汽車だったせいか目がしょぼついている。しかし天気はまったく素晴らしい。雲一つ無い秋晴れだ、背の荷物は一人平均四貫前後。四人（山崎、中沢、斎藤、尾藤）全員コンデイションは全く良い。気持の良い山行に成りそうだ。

九時三十分農場発、広い平担な道が続いている。我々はのパーテイー以外は行者小屋に直行するらしい。我々はオコヤ山を通り、阿彌陀岳を越えて行者小屋に行くコースである。十時十分御川渡河点につく。指導標に右オコヤ山↓阿彌、左行者小屋、赤岳鉱泉と書いてある。指示通り右のコースをとり一時間ばかり歩く。道の様子がおかしいので地図を見直している時に運良く日本山岳会の人が通りかゝった。よく話を聞いてみるとこの右のコースは廃道になっており、指導標を左にとって行者コースの途中でオマヤ尾根に登るコースが出来ているとの事であった。仕方が無いので元の所まで引返す。まったく指導標の間違というのには困ってしまう。それもいたづらしたのでなく、作ったのがいけないというのだから話にならない。十二時に渡河点にもどる。二時間ばかりのロスである。今日は少しピッチを上げねばなるまい、少し行った所で昼食にする。今度のワンデリングでは全部パンである。一食もメシはない、ジュースのうまさが腹にしみわたる。時間が無いので急いで出発。いよいよオコヤ尾根に取りつく道が急になり段々と山らしくなって来た。二時十五分オコヤ山通過、道の間違の為、今から阿彌陀を通っていくと日が暮れそうだ。行者小屋に直行するコースが下の方に見える。しかし四人で協議の結果、予定のコースをやる事に決定した。尚ピッチを上げて阿

彌陀に向け歩き出す。三時三十分最後の水場である不動清水に着く。一休みして水を飲む。阿彌陀の雄大な姿がよく見える。頂上付近はがしていて這松が続いている。道は険しくなる、森林地帯を通り抜け、這松の原も過ぎ五時に阿彌陀の頂上に立つ。日は暮れる寸前だ、太陽が真赤に輝いている。これから下る中岳とのコルまでの道は東面なので暗くなってきている。針金にすがりながら下り始めた。注意しないとスリップしそうである。四十分程で鞍部についた、日はほとんど暮れてしまい、小屋への下り道はまるで見えない、悪い道を四十分ばかり下ると小屋の灯を見つけると恋人に逢った時のようにうれしくなる。千葉医大の人達が十三、四人テントを張っていた。行者小屋に入り、夕食も又パン。手間がはぶけて大変に楽だ、七時半には全員シラフの中にもぐりこんだ。

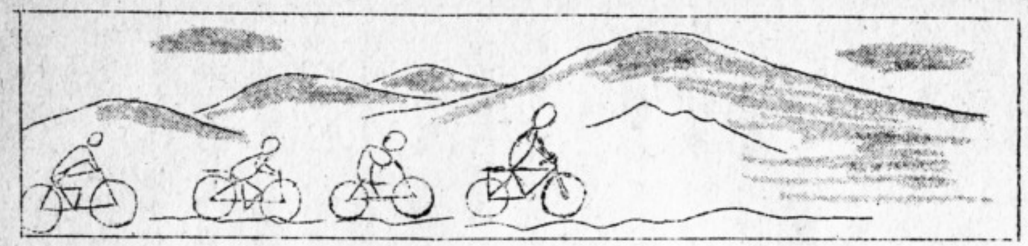
十月十二日五時三十分起床。すぐ表に出てみる。天気はあまり良くない。どうやら雲が出そうな具合だ。七時半赤岳と横岳とのコルに向かって小屋を出た。二百米程のヒリである。ちょっと朝食を食べ過ぎたせいか息苦しい。八時四十分コルに出る。雲が出ており眺望はまるでない。これでは赤岳に登ってもつまらないので、すぐ横岳に向う。八ツ岳中の最高峰に登らぬのは残念だがあきらめた。横岳は十指に近い連峰より成っている。尾根のすぐ下の道を用心深く歩いていくが風が吹き出してきて寒くて休んでいられない。約一時間程でいつの間にか横岳を通り過ぎた、どれが横岳の主峰か解らなかった。でも今だから良いが積雪期の横岳は大変だろう。夏道は通れないからヤセ尾根を歩かねばならない。八本歯アイゼンでなければ来られるまい。そんな事を考えている内に硫黄岳についた。夏沢峠はすぐ目の下だ。硫黄岳の頂上は広い、ガスでも出たら迷い易い所だ。夏沢峠から稲子湯に抜け後はバスだ、もう三時間程で八ツ岳ともお別れである、山を去り都会に帰る時は、何かこう淋しい。山を去る時にこそ真の山の楽しさが解るのではないであろうか。

四人共無事に八ツ岳山行を終え、明日はもはや都会の雑踏の中に住むのかと思うと、山を去り難い気持になる。今度来る時は皆で来よう等と語り合いながら二時半に稲子湯についた。

東北ワンデル

唐沢山神社から日光二荒山神社

文二　高野公敦



月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり」云々と「奥の細道」にある様に、昨年東北ワンゲルサイクリングを行ってから早や一年も間近に迫った今日思い起せば色々の苦労、楽しみ等数々と浮かんで参ります。時期遅い梅雨が浚門の石畳を濡らしてゆく昭和三十二年七月三日午前十時十五分我々国大ワンダーフォーゲル部員十二名は岩手県平泉「中尊寺」を目指してサイクリングの旅に出た。片思いにかられ、風騒の心止みがたくと八百KMまでペタルを踏みだした。中尊寺まで十五日間で走破の予定で女子部員二名をまじえて、グレーのトレーニングパンツにシャツというおそろいのいでたち、仏聖芭蕉が元禄二年、くくり袴にわらじばきで深った奥の細道を若い新しい感覚で探ろうと矢立て代りにペンとカメラで辿ろうという訳である。出発の際は恐らく我々と芭蕉とは思いは同じであった事であろう。しかし我々には絶大なる希望！そして夢があった！我々の住んでいるこの国「日本」をよりよく理解する事にあったのだ。七月三日本校正門を発って、千住大橋から奥州街道を北に向い、日光、黒羽、那須湯本を経て、白河の関を越えたのは七月七日であった。白河の関から北が昔の奥州で須賀川、郡山、二本松、福島、飯坂温泉ここでスサシブリに「アカ」落し、仙台に着いたのが七月十二日、これから所謂「奥の細道」にさしかゝり、塩釜を経て松島へ芭蕉は其処で心ゆくまで憧れの月を眺めたこれが旅の目

的の一つであった、我々もこゝで二泊、これより進んで平泉本年度の最終点に到着した。

出発以来未だ二日目の「栃木県佐野市唐沢山神社と日光二荒山神社」の行動の時だった。我々は調査班と先路班の二つのグループに分れて行動する事を常としていた。十二名中二名はポータだ（中目、美馬）。我々先路班五名は勇んで日光を目指して唐沢山を後にした。

一行五名のメンバーを御紹介致します。この時のリーダの植木さん通称マレちゃん　群馬県産で白毛頭にメガネのオッサン、黒のワイシャツに「キタネエー」ハンチング深く被ると中国の兵隊を思わせる。ウルサイ人でちょっとの事でも本気で怒るから始末が悪い、でも面白い人でワンゲル三羽烏の一人に数えられるだろう。でも彼は最近「イイ」人でも出来たのか実に「オトナシイ」人に成った様で今後大いに期待される一人であろう。

次に竹貫さん俗に「ヤッチャン」デップリとしていて髪の毛を前に垂らした所は「裕次郎」を思わせる。どうです諸君よくよく見たまえ「コーヒ」では安すぎるぞ！。大へん後髪思いである。アンカーを務めて車が来ると「ピッ」「ピッ」と笛を吹く様な人で、中々かわゆい所があるまあ全般にして幼稚である先輩としてはまあまあという所だ。三番目には馬杉さん。一名「馬さん」ワンゲル切っての一番おとなしい人で実に真目で、紅顔可憐な美少年とまでは、いかないかも、知れないけれど「馬さん」と云われる為か顔が少々長い様である。ちょっとの事にも凄くこだわる人で心中奥深くお収めていて表面に出し切れない人で、でも飲むと中々たいした男！注意しろ！次の御登場はいよいよ二塚女士、通称「大つきい お姉ねえちゃま」。「カマイタチ」亦はワンゲル切っての「バテ屋」と言えば急ぐにビンーと来るであろう。何処に行ってもバテない事が無いと言われる位の代物！でも必ず最後迄ついて来るという人で大へん良いワンゲル精神を持っている。諸君大いに見習うべきである。亦装飾するとこれは又実にすばらしく恰好だけは正にマウンチニアと云った所で誰にも劣らないだろう、然し然しである。

以上大へん「シチレイ」な事を申し上げました。オソマチ！以上四名に小生を加えて一行五名である。まだ朝早い唐沢の山は薄くもやがかすんで実に神々しい。まンず神社参拝、我々に取っての生命の綱である。中目神主を

先頭に一列に整列「二拝二拍手一拝」である。

さあ出発！栃木、室の入島、字都宮も早過ぎて　に来かゝると、日光街道は目に見えぬ坂にて、さすがに疲れて来たので「ヒッチロウ」という事は決定、「マレ」ちゃんはるか彼方を見度して一台来るぞという。見ると猛然と一台やって来る。マレがんばれ！「マレ」ちゃんちょっと手を上げると、ものの見事にストップイト、やはり頬が頬を呼んだのか！今市迄「ヒッチリ」今市より日光迄わずかを走行した。下の二荒山神社に自転車を預ける事にした。今夜の宿泊は中禅寺湖畔である。この時何分七時十分で、七時二十分の電車が最終だとの事で一同大いに「アワテタ」。もし乗り遅れたらという事で「馬さん」と「大つきいお姉ちゃん」を電車が来たら我々が来る迄止めて置く様にと万全の策を計かった。我々三名は車を預けに行き大至急引き返し、どうにか最終に間に合った。ほっと一安心！途中ケーブルに乗り換え、ケーブルが登るに従って寒くなり皆んなブルブル、このケーブルの中で大へんだったのである。神社に車を預けに行った時、境内は「下車場止」と、でかい立札が立っていて、車は抱えて入れねば不可能である。中に入れると、

一ぱい気げんの神主さん達が幾人も、自転車が珍しい為か「下車場止」の境内の中で愈々と乗りまわし始めたのである。その時の有様を植木さん得意漫弁で「袴」という言葉を知っているのか、知らぬのか、何だか知らないけど袴の事を「スカート」等と冗談半分で草加センベイをかじりながら雄弁を始めたのでスッカタナイ、同乗している人々の視線は一せいに「コレちゃんに注目、冷静なケーブルの中は一瞬にして笑と化したのである。所がである。いざ降り様とすると前に乗っていた人が一緒に御供を致しましょうと言うのである。一同ポカンとしていると「神社に行くんでしょう」という。「実は私は今夜当直で下から登って来たんです」という。シマッタ！。皆んな顔を見合せてこれは「マズイ」事を言ったぞと、その時のマレチャンの顔といったらとうてい忘れ得る事ではなかろう。少々悪口を言っていたので、天網恢恢疎而不漏、壁に目有り、障子に耳有りと故事に有る様に、余り人の事等言うんぢゃないと一同おわかりに成った事と思う。ワンゲル連中注意せよ！。さてさて御案内に御預りまして無事に中禅寺湖畔二荒山神社に着きにけり、中目、美馬両君達の御努力に寄りまして食事の支度も万

全に整っており、調査班の方は電車がないので下の二荒山神社に今夜の宿泊の事を頼んで来たので、御飯が沢山余るので皆んなオナカ十三分に無理して食べ、一と息入れていると、「ヒョー、ヒョー」さけぶので行って見ると、子は如何に、イロハ四十八曲をテクリ、テクッテ調査班が登って来たのである。しかも荷物を持ってゞあるこれには全く驚いた。これぞ本当のワンゲル精神とでも言うべきものか？　御飯は余り無し、色々かき集めてオナカ一ぱいにしてあげたつもりだけれども、落合、佐川中沢、三君はワンゲル切っての大飯食で、恐らく胃の反能は実に少なかった事と思います。世にこれを人よんで三大飯食と言う、訳して言い過ぎではなかろう、どうで、す皆さん！三君には紙上を持って敬礼。日光の町の灯も次々と消え町は深い眠に落ちいってゆく、近くの旅館で「コケ」を落し、明日の旅の無事を祈り、凄いイビキを聞きながらスヤスヤと眠りにけり、オヤスミ。さてこの長距離のサイクリング旅行によって我々が如何に多くの教養を高め、その思想を僅まし得たかという事は蓋し想像に難くあるまい。奥羽等の未見の天地を踏破して名所旧跡乃至、石碑の数々を探究し、盛衰興亡、有為転変の世のさがをまのあたりに目睹し得た事はいうまでもない。天ざかる鄙の旅路の苦難の体験、交通の不便な道の悪い、文化に余り恵まれない昔ながらの寂しい自然、その寂しい自然に育った人達の昔ながらの純朴な心の相の美しきそして、それらの全てから開かれた我々の心の眼りそれは我々にとつて、どんなに尊いものであつたであろう。この心の眼りの尊い輝きそれが我々の「サイクリングの旅」だったのだ。

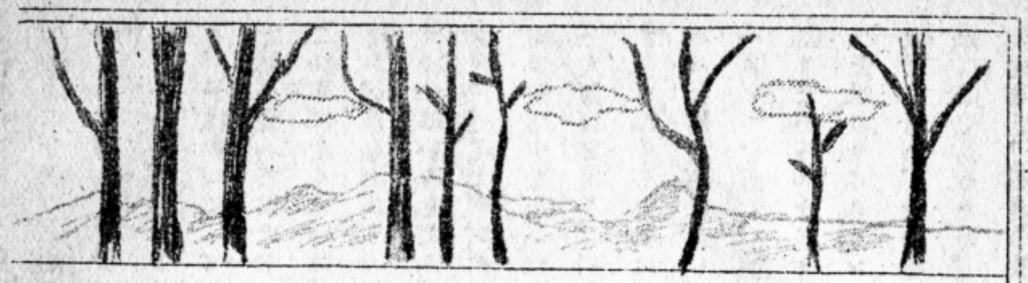
役員プロフィル

中目　正（副将）

東北白河の産。昨年の〃奥の細道〃で奮闘し殊に〃南湖ダンゴ〃の恩人。土地柄の素朴さと慎重さが売り物の好人物。カメラが好きで愛用のニコンとぶるさがったりころがったりで傑作を生む。歌は〃ドジョッコフナッコ〃が定評あり。将来ワンゲルのコツク長になるらしい。

尾藤良孝（副将）

学芸大附属高校山岳部で活躍して現在経験豊富な点においても第一人者。学校内は真面目そのものであるが、山ではその限りにあらず。信望あり体力あり経験ありで主将の片腕となり、今後の活躍が期待される。



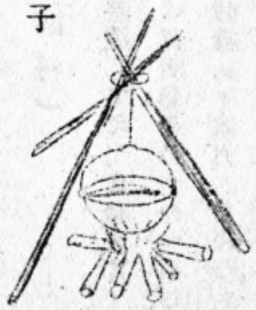
①お手並拝見①

ワンゲルランチ

女三　相原昭子

そもそも「ワンゲルランチ」なる物の名称は、去年の夏季合宿で裏磐梯へ行った時に始まる。「ワンゲルランチ」なんて素的な名前がついているが、実は「おじや」である。

小野川湖に着いた翌日Aグループはベース漕り、Bグループは不動川沢登り、Oグループは附近の名のない山へ出かけたのである。お昼頃から雨が降り始め、Bグループと0グルループが不動の滝でおち合い一緒に雨の中をベースに帰ってきた。このベース地は蛇はもちろん狐や熊の丁度通り道にあり（下の部落のオバサンの話）すぐ側に通称「お化け屋敷」という一軒屋があった。なんでもその家の人が風呂に入っていると、外からヒョイと肩をたたいたものがあるとか・・・昔、磐梯山が噴火した時、地の中に埋まった家の金の鶏が、世に出られなくなって化けて出てくるという話があるそうだ。それでこのお屋敷の住人は、お化けならぬユールブリンナーそっくりの御主人と奥さんの二人であった。



BOグループは、全員ずぶ濡れになって帰ってき、このお屋敷のいろりを借りて着物を乾かした。そしてテントの薪が濡れてしまったので迷惑のかけついでと、このいろりを借りて食事の仕度をする事にした。外は雨、手軽で暖かい夕食をという事で、女子全員で考え出したのが「おじや」であった。その時はまだ「ワンゲルランチ」

などという名はついていなかった。さて作り始めようとすると材料がものすごくお粗末。これではいくら名コックといえども腕のふるいようがなかったであろう。でも、いかに女性が腕をふるったか、ここでワンゲル諸君の後々の参考の為に作り方を発表いたします。

大鍋に米をといで入れ、こまかくきざんだ玉ねぎ、ジャガイモを入れて煮立ったところでお醤油と味の素で味つけしたごく簡単で美味しく、かつ栄養価値のある（？）おじやです。このおじやの食べ方のコツは、あついうちにフーフーいって食べるのが本当なのだが出来上ってから全員が集まるまでに三十分近くかかった為にすっかり冷めてしまって、このおじや本来の味をわかってもらえず、まずいまずいと悪評この上もなく、この時から「ワンゲルの女性に食事はまかせられぬ、お嫁さんにもらうな」という事になってしまった。（ワンゲルの女性諸君怒れ怒れ！）しかし今はすまして学校へ来る男子諸君も、あの時はまずいまずいといいながらもよく食べて下さって有難う。（他に食べ物がなかったからさ、なんていわないでよ）

夕食の時は雨が止んでいたが、ラジオで豪雨になるというので女性だけあのお屋敷に泊めてもらう事にし、男性だけテントに残った。毛布にもぐってうとうとした頃テントの方からワーッという奇声が上った。翌朝聞いてみると昨夜は豪雨どころか月が出たそうだ。それで男性諸君「月にほえる」か・・・

そして長かった一週間の合宿生活もどうにか無事に終り、この時以来ワンゲルの女性をみると「ワンゲルランチ」「ワンゲルランチ」と皆さんよくおっしゃるが、もし一度食べてみたいとおっしゃる方がいらしたら、美味しいのを作ってさし上げますよ。なにしろ一度食べたら二度と忘れる事の出来ない味ですから・・・

登山講座

カメラと山

文三　中目　正

赤外線フイルムについて。

私の写真を初めたのは四・五年前からであろうか？今では私の生活の一部になっている。

写真を撮り初めた動機は私自身思い当らない。

写真について何か書いてみようと思っているが現在では写真などの撮り方は一般常識にさいなっているから私がどおのこおのと言う必要は無いようだ。

現に8ミリシネなどが一般に普及されて来ると、一枚一枚撮る写真などは意味の無い物のような気がして来るが、それぞれに長短がある。

決定的な一瞬を撮るのが一枚一枚撮る写真の生命である。このような見方は山の写真とはあまり深い関係に無いかも知れないが……

山の写真に於ては、白黒の部と赤外線フイルムの部とがある。（勿論カラーフイルムもあるが高価である為この場合抜いておこう）

山岳写真の内で赤外線フイルムを利用して撮った写真は相当ある。

赤外線フイルムを使う時期は、春から初夏までの新緑の頃に使うのが一般常識となっている。

赤外線フイルムは一般のフイルムとやや異なるため私の知っている赤外線フイルムの使い方をのべてみよう。

赤外線は紫外線と同じで目に見えない光線で七六〇～五〇〇〇ミリミクロンの間にある不可視光線である。私たちがいつも物体があるように見える光線、すなわち可視光線は赤外線と紫外線とにはさまれた中間の波長である。

つまり赤外線は目に見えない光線であるからこの見えない光線で写真が撮れるフイルムが必要になる。現在出ている「サクラ赤外線フイルム」は六二〇～八二〇ミリミクロンまでに感じられるように作られており特に七五〇ミリミクロン附近に良く感じられるように作られている。

赤外線フイルムで山の写真を撮る場合に第一に遠景。これは遠景をはっきり撮りたい場合に使用している。これは赤外線フイルムでの写真に於ける最大の使用方法である。

普通のSSクラスのフイルムに赤とか橙色のフイルターを使用して可視光線中に含まれている赤外線を利用してそれに似た効果をあげることもできる。

次に赤外線フイルムは新緑を表現するのに用いることができる。この場合太陽光線の当っている所は白く、反対に太陽光線の届かない木陰は真黒くつぶれるのでこれを利用して、もえ出る若芽や若葉などを美しく表現できる。

これは山の写真まではいかなくともハイキングやピクニックなどに手軽に試みることができる。

赤外線フイルムを使う場合知っておかなければならないことは空と水は黒く撮れること遠景の場合〃モヤ〃や〃カスミ〃などは消えて遠景は良く描写される。この場合雲は消えない。特に白雲は明るく撮れる。

以上赤外線フイルムでの被写体を上げて来たが今度は露出についてのべてみる。

赤外線フイルムの露出は、可視光線を利用している露出計では計ることができない。

ではどのようにして露出を決めるかと言うと空中にある赤外線の量によって決めるのである。

都合の良いことにはこの赤外線の量は晴天の場合朝昼晩を通じてほとんど変化がなく夜以外は大体一定である。またこれは四季を通じてもさほど変化がないので好都合である。

赤外線フイルムは紫から青にも感じるため、これを抑制するために橙色とか赤のフイルターをもちいる。橙色とか赤フイルターを用いても露出倍数と言うものは変らない。

フイルターによっても日中何時でも赤外線の量が変らないとするならば露出も一日中一定で良い。これが赤外感度と言われている。

ウエストン8（A8A20）ぐらいであるからカラーフイルムの感度と変らない。

大体露出は1/63の1/50ぐらいで撮れる。又1/8にすればシャッターは一段落して1/25にすれば良いわけである。

これに極めて明るいときは、やや絞るなどと一般フイルムと同じような方法を少し用いれば良いわけである。（ｆとは絞りの事）

最後に赤外線フイルム使用上の注意を二・三のべておこう。

赤外線フイルムの寿命は約六ケ月である。

また期限近くのものは約１／２ほど感度が減っていることもあるから注意されたい。

またこの赤外線フイルムは熱と湿気に弱いので保存しておく時はカンに入れて冷所に置くと相当に長持ちするようである。

また実際に使う時は直射日光下の装填をさけること、赤窓をあけ放しで撮ることは厳禁である。赤窓をしめなかったためにかぶったりすることがある。

近年はますます山行が盛んになって来るが、こおした山行のときとりつくされた液浮体でも赤外線フイルムでもう一度ねらって見たら良い写真が撮れるのではないだろうか？

その場合の参考にでもなれば私のカメラ講座も成功と言うところである。

役員プロフィル

山本浩靖（マネージャー）

ワンゲルあげての頑固ジジイ的存在で大いに結構なのだが、若くて少々ぐらつきがちなのが玉に傷。実行力はあり特に彼のファイトの精神は定評もの。一見とっつきにくい印象を与えるが時には自称バスでロずさむハンサムボーイ。

笹本太四郎（会計係）

往復四時間位かゝる東京都下から毎日通い続ける勤勉家。細かいことに気がつくことにおいては天下一品。昨年雲取山で〝女房〟の名を授かる。皆を前に心臓が悪いと啖呵を切る強心臓。部費をまだ払ってない亭主達は早いとこ。

馬杉宣彦（庶務係）

愛称は〝ウマサン〟。性格は馬より牛に似ていて普段は実に大人しいが怒ると無我夢中となる。タバコこそあまり喫わないが、上戸の点では兵もの中の兵もの。フェミニストはワンゲル一勝負師の卵で只今マージャンで修業中とか。

33年度

槍ケ岳のはなし

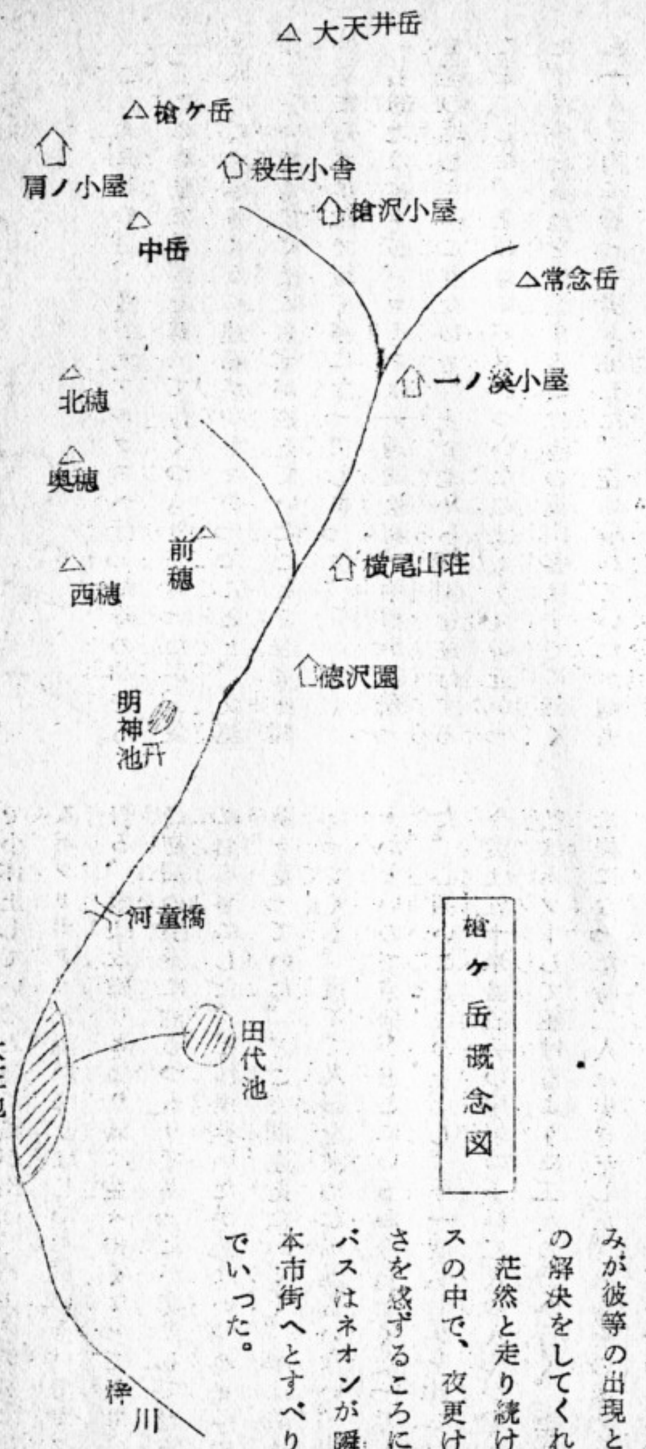
これは昨年の夏、私が北アルプスへ行った時の事である。この時私は仲間を誘って行くつもりであったが、夏休みのため思うように連絡がつかなかったことと、又連絡がついてもすぐ後に合宿が控えていたことで結局仲間が集まらず単独で行く事になってしまった。

目的地は槍ケ岳、コースは一週間程前、中房から登って径の峻しさにこりたので、上高地から梓川を逆行することにした。上高地にバスがついたのはもう九時近かった。私が上高地を出発する頃は他の登山客はすでに無く私一人梓川に沿って歩き出した。空は晴れていたが穂高は雪をかぶっていた。横尾山荘にかゝる頃は大分川幅も狭くなり、左前方には屏風岩がそゝり立っている。この辺から道は山径となる。槍沢の小屋を通り過ぎて暫く行ったころは　川も根雪の下を流れたりしていたが、それもいつか岩に吸い込まれてしまい、そしてあたり一面にシイノキンバイやチングルマが美しく咲いていた。このあたりはすでに森林地帯から脱し、視界も開け眼前には槍沢の雪渓が横たわっている。時間は四時少し前、こゝで小休止していると急に風が出はじめガスがあたりを包みポツリポツリと雨が降りはじめた。いそいでヤッケを着る、雨は本降りとなり風は益々強くなって来た。私は最初肩の小屋に泊るつもりであったが変更して殺生小舎に泊る事にした。どれ程歩いたか私はいつのまにかガレ場を登っていた。どこで間違えたか……。雨は益々強くなってくる。慌てて人影を求めたが誰もいない。視界がきかないので自分がどこにいるか今らなくなってしまった。心細いことこの上なし。今一度あたりを見まわす。今度は五十米程右手の尾根の上に二人の人影が見えた。私はホットして駆けるように二人の方へ行く。距離が十米程になった時二人は歩きだした。私もその後からついて行く。もゝ十分もたったろうか、いつのまにか前を歩いていたはずの二人がいない。確か目と鼻の先を歩いていた彼等、さてどこへ行ってしまったかと必死になって探すが一向に人影らしきものは見あたらない。もとより視界は悪かったが、だからといって岩も窪みも無いこの地、はっきりとその輪廓はつかめなくともその気配位

感ぜられるだろうと思ってみたが結局は駄目だった。然し、幸いにも今度は道もわかった。岩の目印しとケルコを辿ってようようの思いで殺生小舎についた。

この旅も終りに近づいたバスの中で薄暗くなりゆく車窓に目をやりながら、雨の中の奇怪な行え不明の二人のことを考えていた。一体二人はどこへ消えてしまったのだろう。身を隠せる程の大きな岩もなかったはず、天に昇ったか地に失せたか、今尚皆目見当がつかない。只窓越しに遠くにかすむように見える散々たる人家の灯と、時々黒い大木がすうとバスの横面をなめると、その幻影を詫して淋手な想像のみが彼等の出現と消滅の解決をしてくれた。

茫然と走り続けるバスの中で、夜更けの寒さを感ずるころには、バスはネオンが瞬く松本市街へとすべり込んでいった。



槍ケ岳概念図

天城山ハイク

政二　二階堂淳司

プロローグ

N君、T君は高校時代席を並べた仲だが、いつしか自分の先輩となっていた。何処か山へ行こうと会う度に話が出たが、ついぞ延々になって、やっと新学期の始まる前、T大のM君、H君の五人で、伊豆の山を歩く事に決まった。皆高校時代同じクラスで遊んだ仲間なので気のおけぬ奴等だ。

ヒッチ、ハイク

春陽は刻一刻と高くなり、重いザックが汗をしぼり出す。割合に道幅の広いせゝらぎ添いの田舎道を、想い出話に声の休まる暇もなく歩くのだが、話に比例して足はおそくなる。そのうち下から自動車のうなり声がする。やがてゆるやかな傾斜を一生懸命登って来る一台のトラックが目に入った。「おい乗かって行かねえか」反対側によけたM君が言ったかと思うと、両手をあわせてトラックを拝んでいる。「荷物を積んでいるからねえ」としぶい声がしたが、その時はもうザックをおろしかけていた。沢に添って道はどこ迄も続いている。いったい俺達は何処で降りれば良いのだろうと心配しても始まらない。歩くより余程快適だ。地図を車に託してすぐそばに立つ富士を眺めながら、話ははずみ、三等バスはなおも音を立てて走り続ける。伊豆三絶の一つに数えられる達磨山に登った時、小屋の老人が話してくれたその中で、美女は着物の裾を隠しているところに魅力があって、達磨山からの富士のごとく恥もなく全裸を曝たえている富士は一寸いただけないと言う人もいるが君達はどうかと云う様な事を尋ねられた事があった。ビルの向うの、畑の向うの、その又向うの山々にゆるい曲線を描いて坐っている富士ばかり見なれている我々にとって、近くで見る富士、特に駿河湾の上に浮かんでいる富士は、又格別の趣があってすばらしかった。潢山大観も此々からの富士を好んで描かれたとの事だが、此の日の富士山は、何が恥

かしいのか雲を呼んでは上半身を隠している。春未だ浅く残雪は不規則に模様を作っていた。エンジンの音が消えて、辺りが急に静かになった。車がすれちがうのだろうと思いながらおもむろに、パイプに火をつけ「火の用心」のポスターを見下しながら、黒いはげ山を見ていると、運ちゃんが出て来て、荷物を下ろすからこの先は歩いてくれとの由。二時間余り御厄介になったので、さすがに気がひけた。ピース一箱おいて又トボトボと歩き出す。あと三〇分位で遠笠山の　に着くからとの事だったので、予定を変えずに済んだ事が喜しかった。しかしどの辺を歩いているのか、地図は教えてくれない。そのうち大して歩いていないのに、腹が減って来たので、背の物をおろし始めた。ベテラン？の名与にかけても道を定かにしようと思って一人見はらしのきく所をさがして歩きだした。しばらくすると、切出した材木に昼寝をしている人を見つけたので、そっと声をかけてみた。この道は二三年前から出来た道で地図にはのっていないとの御返事。親切に教えられた道順を繰り返しながら、もどり始めると、下からなつかしいエンジンの音。白い石この道にくっきりと紫色の車体を現わしたその上に見なれた奴等が手を振っている。「おい乗れよ」ってな調子で又車上の人となる。残り惜しくもセントラルロッヂで下ろされた。火と水をかりて昼食を用意し「あの山は、うちの庭の様なものだ」と真顔で語る管理人に、あきれながらも、そんけいして夕食の分も、作らせてもらった。礼を述べて三度歩き始めた。車の通れる新道は未完成で百米も行くと道は往き止り。右へ遠笠山へのルートを見

役員プロフィル

二階堂淳司（装備係）

〃先生〃塾の子供達はこう呼ぶ。珠算塾の先生をしている。〃先生〃この言葉こそ彼の風貌を単的にしかも正度簡にいい現わしている。人づき合いも良く、飛び込んで33年いくとしっかりつかまえてくれる感じ。映画は純情もの。音楽はシャンソンで今度ワンゲルの合唱団の先生になる由。

峰村千弘（編集長）

長野県出身。入学時〃坊や〃と先輩から命名さる。人に頼まれても嫌　といえない好人物。弱々しいのが惜しい。面倒なことはまず何よりも嫌い。東北サイクリングでフラレ男第二号に決定、

つけ、太陽のとどかない静かな杉林の道を、楽しむ。遠笠山の登り口に着いたのが一時、今日中に八丁池迄行かねばならないので、伊豆の秘峰は静かに眠らせておこうと二決、万二郎岳に向う。スカイラインコースの指導標が完備していて道を間違う事は未づないので心配ないが水の無いのが何より心細い。四辻を過て万二郎岳の頂に立ったのは二時四〇分。はるか下の方に青い海が白く砕けている。南の海には、大島が意外に近く見える。利島新島、武根島、神津島、三宅島、御蔵島と数えたいところだが、惜しくも霞がうすくすだれを下している。三浦半島や房総半島も見られるはづだが残念。相模湾のくもった海原が、一層乾いた咽喉に水を恋しがらせる。水代りにブドー酒を飲んで良い気持で春風に吹かれていると時の過ぎるのもわからない。無心に散らばっているジュースの空かんをけとばすと無情にも乾いた音を立ててころがる。空かん、紙くづ、らく書の多いのに腹が立つ位だった。やがて吹き上がる風に乗って、ガスがすべての視界に屏風を立ててくれたので仕方なく、万三郎に道を取る。くねくねと曲った不思議な樹木の大群落の中に己を見い出した。馬酔木とか云う木で、ちゃんと立っているのが、おかしくなるようだ。そしてその樹肌の群は一幅の油絵を思わせてくれる。まるで不思議な国のアリス君の様な気持で静かな山道をぬける。二時四〇分、視界のまったくきかない一四〇七米の一等三角点を持つ万三郎岳に出た。三六〇度全てガスがおゝっている。伊豆とは云え雲の上は涼しすぎる。[illegible]の上から、寒さしのぎにガスの中に向って我等此々に有りとばかりにさけぶと、下からもヤッホーの声、始めて会う人間になつかしさを持って、声の主を待っていると驚いた。つめえりの高校生が一人、杖をついて現れた。ショルダーパック一つに折目のきちんとついたズボンをはき、その下から真白な運動靴がのぞいている。我々の恰好がぐんと見劣りするので早々に別れを告げて宿泊地へ急いだ。戸塚峠、臼田峠をうす暗くなった山々の中に越え、八丁池に着いたのはもう星のランプが輝き、樹木は静かな眠りに落ちていた頃だった。池のまわりに三つばかり火が見えて、それぞれに楽しそうに光っている。星の浮かぶ池の水を、咽喉に通して、火をかこみながら夕食を済ませた。テント入ってバーナーに火をつけた。何十回となく失敗をかさねて半分あきらめ顔でをったのが二回で素張らしい音を

たてたので一人美顔でお茶をわかす。

レイン・コース

山の天気はどこでも変化が早い。風が出て雨がしきりにテントを打つ。星をあおいで五時間とたっていない。寒さに毛布は充分役目をはたさない。しかし疲れは寒さ以上なのだろう。次に時計を見たのは翌日の六時だった。ラジオのスイッチを入れると月曜の番組が、始まっていた。天気予報は全く悲感的。やっと十時小雨の中にはい出た我々は、春雨にけむる八丁池の不気味に静まりかえった姿を前にして新ためて山の楽しみを味う、と同時に腹の虫も感嘆しがうなり出す。

十二時、テントを片づけて、昼とも朝ともつかないブレックファーストを済まし、天城峠への下り道を、登り客と声を交しながら、じっとりとぬれて行く。唯風も無くなった名も無い山山にかこまれた道を静かに味いながら。一時三十五分天城トンネルに着いた。そこでバスをつかまえ、下箕作から松崎に抜け、新の古寺の本当に二晩目の夢路をたどった。

フィナーレ

潮風を肌に寒く感じながらも外に出て海岸線を楽しみたい。沼津へ航路をとった一行は全く疲れを知らない。富士が目前に高く広がり、雄大にして優美なその姿は、償網の土歳入りの如き印象を深く残してくれた。後につらなる山々を引きつれ、日本一にふさわしくしかし恥かしそうに今日も又裏の弟子達を肩に乗せて、その全裸を見せてはくれない。

二日目の計画が半減したのと、ガスラインコースが何か満ち足りないものを感じさせていたのだろう。相変らず帰りの船でも元気に話の花が咲いてきた。富士のふもとの海の上で。

役員会便り

○会計。　部費は期日までには必ず納入して貰いたい特に上級生に滞納者が多い。現在滞納している者は九月中に納めて欲しい。本年は新しいテストを導入した上、まだ備品で揃えなければならないものがあるので重ねて部員の滞納は絶対になきよう要望する。尚部員の諸君に部員証を渡しますから取りに来て下さい。（笹本）

○編集。　部誌がやっと発行されたので今度月報として新聞を出そうと一同張り切っています。紀行文、研究文は勿論のこと、その他ワンゲルへの所感やら他人の知らない細かい話など日常生活で気付いたことも寄せて下さい。匿名希望の方も秘密は守ります。（峰）

編集後記

九月に入っても馬鹿に暑かったり、そうかと思うと八月のうちに秋を通り越したような寒い日があったりで近年ずいぶん気候の不順を感じさせる。特に今年は七月の末から八月にかけて台風の御見舞に会い、各地で相当の被害を受けた模様、我々ワンダラーも御多分に漏れず東北サイクリング（平泉ー金沢）でも毎日の様に雨に降られ、八月十二日からの合宿の方もとうとう十五日には下登させられてしまったりで皮肉な空　をうらめしく見上げる日が多かった。

こんな時、部になったのを記念でもするかの様に「野づら」の第一号が発行されたことは当事者としてこの上なく嬉しい。これも又部員の皆様の御協力の賜物と感謝しています。我が部に編集部が誕生したのは昨年の夏だったと思います。初代編集長の植木氏、続いて石川氏を経て不肖小生が三代目を務めることになりましたが、この間何回となく部員の皆様の原稿をいたゞきその上今回の誌にも掲載しなかったことを編集部内の不手際をお詫び申し上げます。理由はどもあれ遅くながらにも発号の出来たことは嬉しい。編集してみるとずいぶん外面的にも内容的にも浅薄なものであるが「ローマは一日にして成らず」との箴言に自信を持って敢えて発行しました。編集部としての〃野づら〃への意図は国大ワンゲルの歩んで行く道を文によって具体的に認識させ、且ついつどこでこの誌を開いても国大ワンゲルの家庭的な温い調和が目の前に浮び上がる文集であることを期待し、強いては部員の質の向上と部の正常なる発展を表、裏両面から狙うことが出来るものと考えています。

いうまでもなく〃野づら〃の発行も部の活動の重要なセクションです。文化が発明改良の部門とそれによって生ずる頽廃物の処理部門が不均衡だと障害が起きると同じよう、部の運営も各部門への部員の感心が不均衡だと正しい発展は望めません。部を愛しているなら〃野づら〃への御意見や希望もどしどし申し出て下さい。又こんなことを皆に話したい、又こんなことを知りたいと思うものを投稿してくれる様願っています。

編集部の仕事が単なる記録のためのものではなく、日常生活の自由の広場であるよう部員の皆様の御努力を切に希望しております。（峰）

野づら　第一号
発行日　昭和三十三年九月一日
編集者　峰　村　千　弘
発行者　東京都渋谷区若木町九
国学院大学ワンダーフォーゲル
印刷所　長野県小県郡丸子町信光社